

# エッセイ

第2回

## お洒落



星田 理

エッセイスト

退職してしばらくしたある日のことである。かみさんがタンスの中を整理している。「古くなった背広は捨ててもいい？」と背広を広げている。「もう着ることも少なくなったからなあ」と返事をしたものの、ちょっと寂しい気がした。近ごろは、背広を着ることがめっきり少なくなった。

広げている背広を見ると、なかには思い出がいっぱい詰まっているものがある。まだ捨てるにはもったいない感じである。紺の背広が多いが、紺といっても色合いが違い、縦縞のものも、チェックの柄もある。既制服であっても目立たないところに気を配ったつもりである。「これ捨ててもいい？」「うーん、その背広？」。それには、ちょっとした思い出があった。

私の背広は、ほとんどが既制服で間に合っていた。体形がほとんど変わらなかったのが幸いした。サイズはA B 7。背広はデパートで買うことが多かったが、色は紺と決まっていたから、面倒なことはなかった。洋服を買うときは、かみさんが一緒に行った。女の目でもってもらう方が何かと安心であった。ウールが何パーセントとか、ポリエステルが何パーセントだとか、細かいところまで見てくれるからだ。色具合や柄を選んで、試着して体に合っていれば、それで買い物は終わりであった。

ある年の初冬のことである。「いつも既制服ばかりだから、たまにはオーダーメイドを着てみたいなあ」と言ってみたのである。かみさんは、ちょっと考えていたが、「そうね、じゃ今度のボーナスで作ってみたら」とあっさり答えが返ってきた。仕立ての背広は久しぶりのことだ。「友達の叔父さんがやっている洋服屋があるので、そこで作ってもらったら」と言う。

数日が過ぎて、その店に行った。背広の色は紺と、あらかじめ、かみさんが電話で話していたので、難しいことはない。生地を確かめ、寸法を測り、おおよその服の形や襟の形、ズボンの幅や長さも決まったので帰ろうと思った。ところが、「裏地はどうなさいますか」と言う。「こんな感じになりますか」と、いくつかの見本を並べてくれたが、

だいたい同じようなものである。これでは仕立てたというだけで、既製服とあまり変わりがない。そこで、ふと裏地ぐらいはちょっと派手なものにしてみようかと思ったのである。それで「ちょっと変わった柄で、もう少し派手なものはありませんか？ 例えば、赤っぽいものとか」と言ってみた。「これ以外になりますと、婦人ものになってしまいますが」。背広の裏地に婦人物を使うなんてむちゃな人だ、ご主人の顔を見ると、そんなふうにも受け取れる。

二週間ほどして服が届いた。かみさんが「わりと早くできたわね」と言い、箱から背広を取り出した途端、「なあ〜に、これ！」と大きな声を上げた。やっぱり裏地のことである。バラの花模様で、しかもえんじの裏地。「そう言われると思っていたよ。いつも紺ばかりだろう？ ちょっと遊びを入れたんだよ」と言い訳する。だが、かみさんもそうは言ったものの、「まあ婦人物でもいいわね」と言ってくれた。

最近、ビジネスの世界でも、オフィシャルな場でもノーネクタイ、カジュアルな服装をよく見かける。だが、私の若かったころは、背広は紺かグレーがほとんどで、それに白ワイシャツにネクタイと、だいたい形が決まっていた。好き勝手な服装は許されなかった時代でもあった。

ところが、こうして久しぶりに仕立てた背広は、えんじの裏地。たかが裏地のことと軽く考えていたが、すっかり気をつかう羽目になってしまった。背広は紺だから上着として問題はなかったが、背広は仕事中には脱ぐことが多い。えんじの裏地なんて見られたら大変である。「なんだ〜その色は」と先輩に嫌味を言われるのがオチである。出張とか会議とかに出るときには、周りに気をつかった。その服を着ていく日は気になったものだ。ちょっとした遊びのつもりだったが、その背広にはいつもハラハラ、ドキドキさせられた。

最近、背広を着る機会がめっきり少なくなった。以前は仕事で出かけるときには紺とかグレー

の服に決まっていたから、リタイアして白っぽい背広とか、ノーネクタイの服装になると、周りが何となく気になるものである。それは自分だけが勝手に気にしていることであるが、体に染み込んだ生活習慣を変えることには、変な度胸もいる。近ごろは、自分なりのお洒落、自分に似合ったスタイルも必要だと考えるようになってきた。何も金をかけてまで、お洒落をすることではないが、何か面白いことを考えて、生活を楽しむことが必要かと思う。自分だけのお洒落は気持ちを和ませてくれる、そんな気がしている。

アイビールックの生みの親、メンズ・ファッション界の元祖といわれる石津謙介さんという人がいる。いまは80歳を超えておられる。石津さんの著書に「男たちへの遺言」というのがある。「遺言」といえば、すぐに遺書を想像してしまうが、そういうことを書いたものではない。石津さんはその中で、男のお洒落について、「最近の男たちは、自分自身を大切にしていないのではないか。まず、お洒落心を持ちなさい、次に、何か面白いことを見つけ出す好奇心を常に持ちなさい」と書いておられる。今も現役で活躍されている石津謙介さんは、その若さの秘密をお洒落心と好奇心にあるという。そして、「自分のためにお洒落をすること、生活を楽しみながら、ワクワク、ドキドキした人生を送ること、それが男たちへの遺言だ」と言っておられる。

お洒落は小さなものでいい。それが自分の心を癒し、自分を大切にできるものであれば、毎日の生活をより一層楽しくすることができると思う。

---

## profile

---

**星田理** ほしだ おさむ

1937年京極町生まれ。'61年北海学園大学卒。北海道開発局札幌開発建設部をスタートに本局、網走開発建設部などを経て留萌開発建設部調査官、'92年退官後は民間勤務。現在は業界月刊誌にエッセイ連載中。囲碁四段。家族：妻、中国新疆ウイグル自治区出身の青年。

---